

# 琉球大学学術リポジトリ

## お泊り保育における母子愛着のダイナミズム

メタデータ	<p>言語: Japanese</p> <p>出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター</p> <p>公開日: 2016-02-01</p> <p>キーワード (Ja): お泊り保育, 愛着, 1群事前事後デザイン</p> <p>キーワード (En): child care camp, attachment, one-group pretest-posttest design</p> <p>作成者: 中尾, 達馬, 山内, 裕子, Nakao, Tatsuma, Yamauchi, Yuko</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/33247">http://hdl.handle.net/20.500.12000/33247</a>

## お泊り保育における母子愛着のダイナミズム<sup>1</sup>

中尾 達馬\* 山内 裕子\*\*

Child-mother attachment dynamism in *Otomari-hoiku* (child care camp)

Tatsuma NAKAO\* Yuko YAMAUCHI\*\*

本研究の目的は、お泊り保育前後で、(1)子どもの母親に対する会話、(2)母親の分離意識、(3)子どもの園生活への適応がどのように変化したのか、また、(4)母親はお泊り保育に何を期待し、お泊り保育終了後、子どもにどのような変化を感じ取ったのか、を検討することを通して、お泊り保育における母子愛着のダイナミズムを明らかにすることであった。調査対象者は、A幼稚園（山口県）で実施されているお泊り保育に参加した園児の母親52名であり、お泊り保育の前後に質問紙調査を行った。その結果、(1)子どもの園生活への適応は、お泊り保育後に減少すること、(2)不安定型の子どもは、お泊り保育後に、より自分自身の経験について母親に話すようになること、(3)不安定型の母親は、安定型の母親に比べて、お泊り保育後に、自身の子どもは自信を持つようになったと思う一方で（特に女児の場合）、大人に甘えるようになったと認識していること、が示された。これらの結果は、不安定型の母子における愛着と探索の慢性的な機能不全プロセスの一端を表していると解釈できる。

キーワード：お泊り保育、愛着、1群事前事後デザイン

### 問題と目的

はじめに 保育や育児における問題や援助・助言を、愛着の視点から考えることは非常に重要である。なぜなら、この視点は、混乱した際の情報の再整理に役立つだけでなく、より具体的な方策を提案する手助けとなるからである（数井、2012）。

問題 お泊り保育<sup>2</sup>という行事は、遠足と同様に、「子どもの視野を広げるための非日常的な保育活動」として位置づけられている（平岩・一盛、1987）。そして、お泊り保育には、他の

行事に比べて、母子愛着のダイナミズムを観察しやすいという特徴がある。なぜなら、お泊り保育では、特に、「夜、親元を離れて寝る」ということに関連して、子ども側に不安や恐れが活性化されやすく、その結果、養育者側に安全基地（secure base）や安全な避難所（safe haven）としての働きが求められやすいと考えられるからである。

しかし、お泊り保育についての実証的研究は数少なく（清水・岡嶋・米田、2003；谷田貝・村越・西方・鹿又、1988）、これらの研究にお

\* 琉球大学教育学部

\*\* 東割保育園

いては、お泊り保育の実態<sup>3</sup>やお泊り保育の意義・教育効果<sup>4</sup>という視点からしか研究が行われていない。

**目的** そこで本研究の目的は、お泊り保育前後で、子どもの母親に対する会話や母親の分離意識、園生活への適応がどのように変化したのか、また、母親はお泊り保育に何を期待し、お泊り保育終了後、子どもにどのような変化を感じ取ったのか、を検討することを通して、お泊り保育における母子愛着のダイナミズムを明らかにすることであった。そして、筆者らであれば、お泊り保育事前保護者説明会において、どのような助言をするのかを、具体的に提案することを試みる。

なお、お泊り保育の時期や場所および期間は、各園の子どもの実態、園の保育理念、目的や適切な宿泊施設などによって決められている（菅田、2000）。したがって、それぞれの園によってお泊り保育の実施形態や参加児（者）は多種多様であると考えられた。そのため本研究では、山口県にある私立A幼稚園（以下、A幼稚園とする）の1事例を対象に調査を実施した。以下に、A幼稚園の園長先生に承諾を得た上で、A幼稚園のお泊り保育の特徴を述べる（A幼稚園のお泊り保育実践の詳細については、中尾・山内（2012）を参照のこと）。

**A幼稚園のお泊り保育の特徴** A幼稚園は、昭和59年からお泊り保育を実施しており、年中児も参加すること（年中児は自由参加であるが毎年ほとんどの年中児が参加）、保護者にお手伝いをほとんど依頼しないこと、園内でお泊り保育を行うことがその特徴である。また、お泊り保育のねらいは、「自信と自立心を育てる」、「共同生活の中で規則正しい生活をする」（食事・就寝・早起き・あいさつ等をきちんとする）、「日常の幼稚園生活では、お互いに発見できなかつたものを確認する」、「一緒に寝泊まりすることによって一層先生や友だちとのつながりを深める」、「年長児にとって最後の夏の楽しい思い出をつくる」の5つであった。そして、A幼稚園のお泊り保育は、Figure 1に示す流れで行われていた。

<1日目>	年中	年長
14:40	集合・挨拶	注意・お約束
15:00	すいかわり・おやつ	
16:00	プール	夕食準備（野外炊飯） ・カレー・ミニゼリー
		夕食
18:00	自由遊び	プール
19:00		夕べの会・花火
20:30		就寝準備
21:00		就寝

<2日目>	年中	年長
6:30	起床・洗面・着替え	
6:45		ラジオ体操・朝食準備
7:00		朝食
8:00		荷物整理
8:30		おかえりの会
8:40～9:00		降園

Figure 1 A幼稚園のお泊り保育の流れ  
(2007年7月7日・8日)<sup>1)</sup>

1) 中尾・山内（2012）のFigure 2を再掲した。

## 方 法

**調査対象者** 調査対象者は、A幼稚園のお泊り保育に参加した年中児36名および年長児32名の保護者であった。そのうち事前事後の両方の質問紙に回答のあった年中児の母親28名と年長児の母親24名の計52名が分析の対象となった（全体の回収率=76.5%）。

**質問紙** 本研究で実施した質問紙は、フェイスシートと以下の5つの尺度から構成されていた。フェイスシートと愛着スタイル尺度、お泊り保育期待尺度は事前調査でのみ、お泊り保育変化尺度は事後調査でのみ実施した<sup>5</sup>。そして、親子の会話内容と分離意識に関する尺度は、事前事後の両方の調査で実施した。

**フェイスシート** フェイスシートは、保護者の年齢・性別、お泊り保育に参加するのは第何子か、参加する子どものクラス・年齢・性別、自身がお泊り保育に際して感じている不安の程度（1=「全く不安を感じていな」から7=「非常に強く不安を感じている」）、子どもがお泊り保育に際して感じている不安の程度（評定値は同上）、子どもがお泊り保育を楽しみにしてい

る程度（1 = 「全く楽しみにしていない」から7 = 「非常に楽しみにしている」）から構成されていた。

**お泊り保育期待尺度** 保護者がお泊り保育に對して何を期待するのかを明らかにするための尺度である（項目例：自信がつくこと、友達の輪が広がること）。この尺度は、13項目から構成されており、7件法（1 = 「全く期待しない」から7 = 「非常に強く期待する」）で評定を求めた。

**愛着の個人差** 母親および子どもの愛着スタイル<sup>6</sup>を決定する尺度としては、「関係尺度」（RQ: Relationship Questionnaire、Bartholomew & Horowitz, 1991）の日本語版（加藤, 1999）を用いた。回答に際し、調査対象者は4つの愛着スタイル（安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型）の特徴が記述してある文章を読み、それぞれについて自分（あるいは自分の子ども）にどのくらいよく当てはまるかを7件法（1 = 「全く当てはまらない」から7 = 「非常によく当てはまる」）で評定した。次に、その4つの中から最もよく当てはまる愛着スタイルを1つ選択した。

RQでは、この最後に1つ強制選択させたものを、その個人の愛着スタイルとみなす。なお、本研究では、幼児期の愛着の測定方法である愛着Qソート法（Waters & Deane, 1985）が愛着の安定性－不安定性という次元を用いて愛着の個人差を表現するために、4分類ではなく2分類（安定型、不安定型 [拒絶型、とらわれ型、恐れ型の3タイプを併合]）を用いて分析を行った。

保護者用のRQ（i.e., 成人用RQ）については、既にその信頼性と妥当性が確認されているが（中尾・加藤, 2004）、子ども用RQについてはそれらが未確認であった。そこで、本研究では、「保育者評定用レジリエンス尺度」（高辻, 2002）についても、事前調査実施時に保護者に回答を行ってもらい（N=59）<sup>7</sup>、同じ保護者が回答した子ども用RQとの関連を検討した。その結果、「社会的スキルの柔軟な利用」（ $\alpha = .77$ ）では、安定型（M=4.68）は、不安定型（M=4.29）に比べて得点が有意に高く（ $p < .05$ ）、また、「ストレス耐性」（ $\alpha = .66$ ）では、安定型（M=4.73）

は、不安定型（M=4.30）に比べて得点が有意に高い傾向（ $p < .10$ ）にあった。したがって、子ども用RQについても予備的な妥当性は得られたといえよう。

**園生活への適応** 子どもの園生活への適応の程度を測定するために、「園生活への適応尺度」（高辻, 2002）を実施した（項目例：園での一日を楽しそうにすごしている。仲の良い友だちがたくさんいる。友達との遊びに積極的に参加している）。項目数は「ひとりでぼつんといことがある」を除いた4項目であり、7件法（1 = 「全く当てはまらない」から7 = 「非常によく当てはまる」）で回答を求めた。

**親子の会話内容** 子どもが質問紙に回答を行った保護者とどのような会話をどの程度行っているのかを捉えるために「会話内容頻度尺度」（小松, 2003）を実施した。この尺度は、「園で出会う人との関係について」（項目例：お子様が友だちにしてもらったこと；お子様が友だちにしてあげたこと）、「園で出会う人の特徴について」（項目例：友だちの性格；友だちができること「[こんなことができる」という話]）、「お子様自身の経験について」（項目例：うれしかった、楽しかったなどの気持ち；つまらなかつた、いやだったなどの気持ち）の3因子（計15項目）から構成されており、7件法（1 = 「全く話題にならない」から7 = 「非常によく話題になる」）で評定を求めた。

**分離意識** 保護者が子どもと分離することに對してどのような意識を持っているのかを捉えるために、お泊り保育向けに表現を一部修正した「（母親の）分離意識尺度」（塩崎・無藤, 2006）を実施した。この尺度は、「子どもに対する不安・心配」（項目例：自分の子どもと離れている時に、子どもの機嫌が悪くなったら、世話をしてくれている人がなだめることができるかどうか心配になる）、「母親（私）の存在の大きさ」（項目例：自分の子どもは他の人よりも私と一緒にいる方がいいと思う）、「子どもと離れる寂しさ」（項目例：自分の子どもと半日以上離れていると、抱いたりしてやれないことを寂しく思う）、「分離肯定感」（項目例：自分

の子どもにとって、私と離れて過ごすことは、新しいできごとにつましく対処できるようになるためによいことである)の4因子(計25項目)から構成されており、7件法(1=「全く当てはまらない」から7=「非常によく当てはまる」)で回答を求めた。

**お泊り保育変化尺度** お泊り保育変化尺度は、お泊り保育を経験することによって、子どもたちにどのような変化が表れたのかを捉えるための尺度である(項目例:自信を持つこと、友達の輪を広げること、協調性を持つこと)。この尺度は、15項目から構成されており、7件法(-3=「かなりできなくなった」から+3=「かなりできるようになった」)で評定を求めた。

**手続き** 私立A幼稚園の園長先生に調査を依頼し承諾を得た後、同園の先生方に事前に質問紙を渡して、お泊り保育に参加する年中児と年長児の保護者に配布してもらった。事前調査は2007年6月22日に配布し、2007年7月6日に回収を行った。そして事後調査は2007年7月13日に配布し、2007年7月20日に回収を行った。調査対象者の事前アンケートと事後アンケートは、久木山(2005)を参考に、暗証番号(「携帯電話の最後の下2桁」と「誕生日の日にち」の計4桁の番号)を用いて同定を行った。

## 結 果

**調査対象の概要** 事前事後の質問紙に回答を行った保護者とお泊り保育に参加した子どもの属性については、その基礎的情報をTable 1に示した。

**本研究で用いた尺度の記述統計量** 各尺度について、クロンバッックの $\alpha$ 係数を算出した結果、「園生活への適応尺度」以外では、概ね、十分な内的整合性が得られた。そこで、これらの尺度の尺度得点は、各因子に対応する項目の評定値の平均として算出した(Table 2)。そして、園生活への適応尺度については、4項目での $\alpha$ 係数は必ずしも高い値ではなかったが(事前=.61、事後=.53)、「登園時の朝の支度がスムーズにできる」を除くと $\alpha$ 係数が上昇した(事前=.79、事後=.74)。そこで、この項目を除いた3項目の評定値を平均して、園生活への適応尺度の尺度得点とした(Table 2)。

Table 2の各尺度について、事前事後の変化があるかどうかを「対応性のあるt検定」で検討した結果、「園生活への適応」において有意差があった( $t(51)=2.04, p<.05$ )。したがって、お泊り保育の前に比べると、お泊り保育の後では、子どもたちの園生活への適応の度合い

Table 1 調査対象の属性<sup>1)</sup>

年中組		年長組		全体	
<母親について>					
年齢	平均36.2歳 (SD=4.49)	平均34.9歳 (SD=3.88)	平均35.6歳 (SD=4.22)		
愛着	安定型 12名	安定型 10名	安定型 22名		
スタイル	不安定型 15名	不安定型 12名	不安定型 27名		
<お泊り保育参加児について>					
年齢	平均4.8歳 (SD=0.32)	平均5.7歳 (SD=0.26)	平均5.1歳 (SD=0.54)		
性別	男児 14名	男児 13名	男児 27名		
	女児 14名	女児 11名	女児 25名		
出生順位	第一子 16名	第一子 13名	第一子 29名		
	第二子 9名	第二子 10名	第二子 19名		
	第三子 3名	第三子 1名	第三子 4名		
愛着	安定型 20名	安定型 14名	安定型 34名		
スタイル	不安定型 6名	不安定型 8名	不安定型 14名		

1) 愛着スタイルの割合は、母親では、安定型22名、拒絶型2名、とらわれ型16名、恐れ型9名であり、お泊り保育参加児では、安定型34名、拒絶型1名、とらわれ型11名、恐れ型2名であった。

Table 2

事前事後の両方の調査で用いた尺度の記述統計量<sup>1)</sup>

尺度名・下位尺度名	事前	事後
	平均値 (SD)	平均値 (SD)
(1)園生活への適応尺度		
園生活への適応（3項目） ( $\alpha = .79, .74$ )	5.34 (0.99)	5.16 (0.90)
(2)会話内容頻度尺度	4.23	4.34
園で出会う人との関係について ( $\alpha = .82, .87$ )	(1.10)	(1.13)
園で出会う人の特徴について ( $\alpha = .83, .80$ )	4.13 (1.27)	4.25 (1.14)
お子様自身の経験について ( $\alpha = .80, .86$ )	5.01 (1.08)	5.07 (1.18)
(3)（母親の）分離意識尺度		
子どもに対する不安・心配 ( $\alpha = .75, .85$ )	3.25 (0.95)	3.19 (1.01)
母親（私）の存在の大きさ ( $\alpha = .81, .88$ )	3.33 (0.99)	3.16 (0.98)
子どもと離れる寂しさ ( $\alpha = .90, .91$ )	3.15 (1.44)	3.11 (1.40)
分離肯定感 ( $\alpha = .66, .81$ )	5.35 (1.00)	5.36 (1.06)

1) 表中の  $\alpha$  係数は、（事前 = 事後）である。お泊り保育に対する子どもおよび保護者の不安、子どもがお泊り保育を楽しみにしている程度、お泊り保育期待尺度、お泊り保育変化尺度の記述統計量については、中尾・山内（2012）の Table 7 を参照のこと。

が低くなることが示された（事前 = 5.34、事後 = 5.16）。

以下では、まず、Table 1 に示した子どもの基本属性（性別、所属クラス、出生順位）によって、お泊り保育の前後で、「園生活への適応」、「親子の会話」、「保護者の分離意識」が異なるかどうかを検討する。次に、子どもの基本属性によってこれらの尺度得点に有意差がある場合には、その基本属性変数を要因計画に組み込んだ上で、愛着スタイルによって、先の 3 尺度の得点がお泊り保育前後で異なるかどうかを分析する。

**園生活への適応** はじめに、子どもの基本属性（性別、所属クラス、出生順位）によって、お泊り保育の前後で、園生活への適応が異なるかどうかを検討した。具体的には、2（子どもの基本属性<sup>8)</sup>） $\times$ 2（事前事後：お泊り保育前、お泊り保育後）の 2 要因混合計画の分散分析を行った。前者は調査対象者間要因であり、後者は調査対象者内要因であった。その結果、事前事後の主効果においてのみ、有意傾向が見られた（ $F(1, 46) = 3.67, p < .10$ ）。

は調査対象者内要因であった。その結果、事前事後の主効果が、子どもの基本属性として、子どもの性別、出生順位を用いた場合には有意であり（それぞれ、 $F(1, 50) = 4.13, p < .05$ ； $F(1, 50) = 4.21, p < .05$ ）、また、子どもの所属クラスを用いた場合には、有意傾向が見られた（ $F(1, 50) = 4.00, p < .10$ ）。したがって、先程と同様に、子どもの園生活への適応の度合いは、お泊り保育の前に比べると、お泊り保育の後では、低くなることが示唆された。

では、子どもの愛着スタイルによって、お泊り保育前後の園生活への適応はどのように異なるのだろうか。2（子どもの愛着スタイル：安定型、不安定型） $\times$ 2（事前事後：お泊り保育前、お泊り保育後）の 2 要因混合計画の分散分析を行った。前者は調査対象者間要因であり、後者は調査対象者内要因であった。その結果、事前事後の主効果においてのみ、有意傾向が見られた（ $F(1, 46) = 3.67, p < .10$ ）。

**親子の会話** まず、子どもの基本属性（性別、所属クラス、出生順位）によって、お泊り保育の前後で、親子の会話内容が異なっているかどうかを検討した。具体的には、先程と同様に、2（子どもの基本属性） $\times$ 2（事前事後：お泊り保育前、お泊り保育後）の 2 要因混合計画の分散分析を行った。その結果、「園で出会う人との関係について」では、子どもの性別の主効果が有意であった（ $F(1, 50) = 12.64, p < .01$ ）。したがって、女児（ $M = 4.67$ ）は、男児（ $M = 4.03$ ）に比べて、「園で出会う人との関係について」より母親と会話をしていることが示された。

同様の分析を、「園で出会う人の特徴について」においても行った結果、子どもの性別の主効果が有意であった（ $F(1, 50) = 21.88, p < .01$ ）。したがって、女児（ $M = 4.81$ ）は、男児（ $M = 3.74$ ）に比べて、「園で出会う人との関係について」より母親と会話をしていることが示された。また、「園で出会う人の特徴について」においては、子どもの出生順位の主効果も有意であった（ $F(1, 50) = 4.30, p < .05$ ）。すなわち、第 2 子（ $M = 4.70$ ）は、第 1 子（ $M = 4.03$ ）に比べて、「園で出会う人の特徴について」より母親と会話をしていることが示された。

3.90) に比べて、「園で出会う人との関係について」より母親と会話をすることが示された。

さらに、「お子様自身の経験について」においても同様の分析を行った結果、子どもの性別の主効果が有意であった ( $F (1, 50) = 22.51, p < .01$ )。よって、女児 ( $M = 5.71$ ) は、男児 ( $M = 4.47$ ) に比べて、「自分自身の経験について」より母親と会話をを行っていることが示された。

以上の分析によって、親子の会話の頻度には、子どもの性別によって違いがあること、そして「園で出会う人の特徴について」においては、子どもの出生順位によっても違いがあることが示された。そこで、子どもの愛着スタイルによって、お泊り保育前後の親子の会話にどのような違いがあるのかということについては、子どもの性別や出生順位といった子どもの基本属性を要因に組み込んで分析を行った。すなわち、2(子どもの基本属性)  $\times$  2(子どもの愛着スタイル: 安定型、不安定型)  $\times$  2(事前事後: お泊り保育前、お泊り保育後) の3要因混合計画の分散分析を実施した。はじめの2要因は調査対象者間要因であり、最後の1要因は調査対象者内要因であった。その結果、子どもの出生順位を組み込んだ分析については、2次の交互作用に有意傾向が見られたのみであった ( $F (1, 44) = 3.30, p < .10$ )。

次に、子どもの性別を組み込んだ分析を行った結果、「園で出会う人との関係について」や「園で出会う人の特徴について」においては、子どもの性別の主効果のみが有意であった(それぞれ、 $F (1, 44) = 11.59, p < .01$ ;  $F (1, 44) = 17.59, p < .01$ )。しかし、「お子様自身の経験について」では、子どもの性別の主効果だけではなく、子どもの愛着スタイル  $\times$  事前事後の交互作用も有意であった(それぞれ、 $F (1, 44) = 19.67, p < .01$ ;  $F (1, 44) = 5.43, p < .05$ )。そこで下位検定を行った結果、不安定型における事前事後の単純主効果が有意であった ( $F (1, 44) = 6.05, p < .05$ 、Figure 2)。すなわち、不安定型は、お泊り保育前に比べて、お泊り保育後に、「自分自身の経験について」より母親と会話をを行っていた。

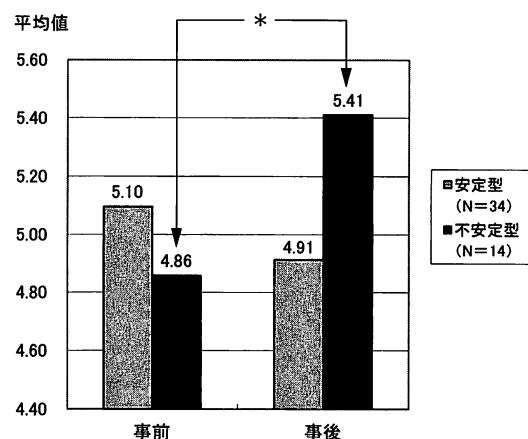


Figure 2  
子どもの愛着スタイルによるお泊り保育前後の「お子様自身の経験について」の母子間の会話頻度の変化 (\*  $p < .05$ )

**保護者の分離意識** 子どもの基本属性(性別、所属クラス、出生順位)によって、お泊り保育の前後で、母親の分離意識が異なるかどうかを検討した。具体的には、2(子どもの基本属性)  $\times$  2(事前事後: お泊り保育前、お泊り保育後)の2要因混合計画の分散分析を行った。その結果、「子どもに対する不安・心配」、「母親(私)の存在の大きさ」、「子どもと離れる寂しさ」、「分離肯定感」の全てにおいて、有意な主効果および交互作用は得られなかった。

次に、母親の愛着スタイルによって、お泊り保育前後の分離意識がどのように異なるのかについて検討を行った。具体的には、2(母親の愛着スタイル: 安定型、不安定型)  $\times$  2(事前事後: お泊り保育前、お泊り保育後)の2要因混合計画の分散分析を行った。前者は調査対象者間要因であり、後者は調査対象者内要因であった。その結果、「子どもと離れる寂しさ」において、母親の愛着スタイル  $\times$  事前事後の交互作用が有意であった ( $F (1, 46) = 4.58, p < .05$ )。そこで下位検定を行った結果、安定型における事前事後の単純主効果に有意傾向があった ( $F (1, 46) = 2.89, p < .10$ )。したがって、安定型は、お泊り保育の前 ( $M = 3.36$ ) に比べて、お泊り保育の後 ( $M = 2.99$ ) の方が、「子どもと離れる寂しさ」は減少する傾向にあった。

**フェイスシート、お泊り保育期待尺度** 中尾・山内（2012）において、既に、子どもの基本属性（性別、所属クラス、出生順位）によって、フェイスシートやお泊り保育期待尺度の得点がどのように異なるのかは、検討を行った。その結果を再掲すると、次のようにになる。すなわち、(1)年中組の親は、年長組の親に比べて、「a. お泊り保育に対して親が感じている不安の程度」の得点が有意に高く、(2)第二子以降の子どもは、第一子に比べて、「c. 子どもがお泊り保育を楽しみにしている程度」の得点が有意に高かった。そこで、フェイスシートの「b. お泊り保育に対して子どもが感じている不安の程度」と「c. 子どもがお泊り保育を楽しみにしている程度」については、2（子どもの基本属性）× 2（子どもの愛着スタイル：安定型、不安定型）、「a. お泊り保育に対して親が感じている不安の程度」やお泊り保育期待尺度の各項目については、2（子どもの基本属性）× 2（母親の愛着スタイル：安定型、不安定型）の解析を行った。その結果、上記と同じ子どもの基本属性の主効果は得られたが、愛着スタイルの主効果や子どもの属性×愛着スタイルの交互作用は有意ではなかった（唯一、「a. お泊り保育に対して親が感じている不安の程度」についてのみ、愛着の主効果に有意傾向が見られ ( $F(1, 45) = 2.95, p < .10$ )、不安定型は ( $M = 2.85$ ) は、安定型 ( $M = 2.05$ ) に比べて、得点が有意に高い傾向にあった）。

**お泊り保育変化尺度** お泊り保育変化尺度についても、既に、中尾・山内（2012）において、子どもの基本属性（性別、所属クラス、出生順位）によって、尺度の得点がどのように異なるのかは、検討を行った。その結果を再掲すると、次のようにになる。すなわち、(1)女児は、男児に比べて、「1. お泊り保育によって自信がついたかどうか」、「6. 新たなことに挑戦しようとするようになったかどうか」、「10. 先生や友だちとのつながりを深めることができたかどうか」の得点が有意に高く、(2)年長組は、年少組に比べて、「11. 夜一人で寝ること」や「12. 親離れができるようになること」の得点が有意に高かった。

そこで、2（子どもの基本属性）× 2（母親の愛着スタイル：安定型、不安定型）の解析を行った結果、上記と同じ子どもの基本属性の主効果に加えて、「1. 自信を持つこと」では、愛着スタイルの主効果 ( $F(1, 45) = 4.30, p < .05$ ) と性別×愛着スタイルの交互作用 ( $F(1, 45) = 4.17, p < .05$ ) が有意であった。そして、下位検定の結果、不安定型の母親 ( $M = 1.00$ ) は、安定型の母親 ( $M = 0.55$ ) に比べて、「1. 自信を持つこと」の得点が有意に高く、さらに、不安定型の母親における性別の単純主効果および女児における母親の愛着スタイルの単純主効果が有意であった ( $F(1, 45) = 13.63, p < .05$  ;  $F(1, 45) = 8.61, p < .05$  ; Figure 3)。また、 $t$  検定の結果、「7. 大人に甘えること」でも有意差が見られ ( $t(47) = 2.25, p < .05$ )、不安定型の母親 ( $M = 0.52$ ) は、安定型の母親 ( $M = 0.09$ ) に比べて、得点が有意に高かった。

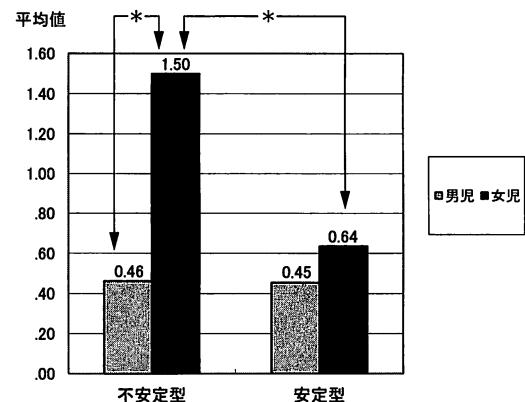


Figure 3  
母親の愛着スタイルによる「自信を持つこと」得点の違い (\*  $p < .05$ )

## 考 察

本研究で得られた主な結果を整理すると、以下のようになる。すなわち、(1)子どもの園生活への適応は、お泊り保育後に減少すること、(2)不安定型の子どもは、お泊り保育後に、より自分自身の経験について母親に話すようになること、(3)不安定型の母親は、安定型の母親に比べ

て、お泊り保育後に、自身の子どもは自信を持つようになったと思う一方で（特に女児の場合）、大人に甘えるようになったと認識していること、が示された。

**母子愛着のダイナミズム** これらの特徴は、まさに、不安定型の母親（特に、とらわれ型の母親）は、子どもの自立や探索を促すことが不得手であるという知見（e.g., Main, 2000）と一致する。解釈を続けるならば、乳児期に不安定型だった子どもは、就学前においては、サークル・タイム（みんなで輪になって歌やダンスをする時間）の際には保育者の隣によく座り、全体的に依存的であった（Sroufe, Fox, & Pancake, 1983）。さらに、これらの子どもは、10歳時点のサマーキャンプにおいても、キャンプ中に、全体的に大人との接触を好み、より依存的であったと報告されている（Urban, Carlson, Egeland, & Sroufe, 1991）。これらの知見を参考にするならば、お泊り保育においては、実際には、不安定型の子どもは、安定型の子どもに比べて、種々の自律的な探索を行っていないかもしれない。しかし、不安定型の子どもは、お泊り保育終了後に、母親に対して、少なくとも自分の正負両方の気持ちを伝えるようになっていた。このことを不安定型の母親は、子どもに自信がついたとポジティブに捉える一方で、甘えるようになったとネガティブにも捉えていた（Simpson, Ickes, & Grich (1999) で明らかになったように、とらわれ型の推論は正確であり、実際、子どもの園への適応得点は減少しているので、この推測自体は必ずしも間違った推測ではない）。このようなダイナミズムは、まさに、先にMain (2000) が指摘した、探索における不安定型の慢性的な機能不全の一端を如実に示しているといえよう。つまり、母親の推測自体は正しいのだが、安全基地や確実な避難所としては、必ずしも上手く機能していないのである。

したがって、筆者らが仮に、A園におけるお泊り保育事前説明会（中尾・山内（2012）の研究1）において、付け加えることがあるとするならば、「お泊り保育が終わった後で、お母さ

んから見ると、お子さんは、自信がついたと思う一方で、最近、甘えるようになった・落ち着かなくなったりと感じてしまうかもしれません。ただし、これは一時的なものですので、あまり気にしないで十分甘えさせてあげてくださいね」ということになろう<sup>9</sup>。

**安定型にとってのお泊り保育** 本研究では、不安定型の子どもにはお泊り保育前後で自分のことをよく話すようになるという変化が見られたが、安定型の子どもには、このような変化は見られなかった。では、お泊り保育の前後で変化が見られなかった安定型の子どもにとって、お泊り保育はどのような意味があったのだろうか。それは、おそらく、A園のお泊り保育のねらいにあるように、「夏の思い出」となるのではないだろうか。しかし、もともと愛着対象に見守られながら、不安定型の子どもに比べて自己効力感や自信を育んでいた安定型の子どもにとっては（数井・遠藤, 2005）、お泊り保育は自身の自己効力感や自信を「育む」というよりは「確かめる」という機会になったのかもしれない。そのため、お泊り保育の前後で、変化が生じなかつた可能性が高いと考えられる。

**分離意識** 本研究では、安定型の母親においては、「子どもと離れる寂しさ」は、お泊り保育前後で減少する傾向にあるという知見が得られた。このような傾向が得られたのは、安定型は、不安定型に比べて、寂しさという感情を、愛着行動やサポート・シーキングを通して低減できていたからかもしれない。この点については、今後さらなる検討が必要であろう。

**本研究の限界点と今後の課題** 本研究には、以下に示す4つの限界点および今後の課題が残されている。

第1に、本研究は、1群事前事後テストデザインを用いて研究を行っている。そのため、今後は、統制群を加えて、不等価2群事前事後テストデザインを用いて、本研究で得られた知見をさらに確認する必要があろう（南風原, 2001）。

第2に、本研究は、私立A幼稚園のお泊り保育1事例についてのみ検討を行っている。した

がって、今後は、他の園においても調査を実施する必要があろう。

第3に、本研究では、子どもの愛着の個人差を「いろいろな対人関係において概して行っているであろう愛着行動」に基づき測定している。今後は、母親に対する愛着や保育者に対する愛着を厳密に測定し、それらがどのように交互規定的に影響を与えるながら、子どもの園生活での行事体験に影響を与えるのかをより詳細に検討する必要性があろう。

第4に、本研究では、中尾・山内（2012）も含めて、登園・降園およびお泊り保育中に、年長児と年中児の違いは観察できても、安定型の子どもや保護者と不安定型の子どもや保護者の違いを見出すことができなかった。この点についても、今後さらなる検討が必要であろう。

## 注

1 本研究は、第一著者指導のもと、山内（宗像）裕子さんが、2008年に山口芸術短期大学専攻科に提出した卒業論文データの一部を再分析し、加筆・修正を行ったものです。また、本研究の一部は、American Psychological Society第20回大会（シカゴ）において発表を行いました。本研究が調査対象とした私立A幼稚園（山口県）のお泊り保育実践の詳細については、中尾・山内（2012）を参照してください。本研究では、一部、中尾・山内（2012）の研究4の再分析結果を掲載しています（本研究と中尾・山内（2012）の研究4の調査対象者は同じです）。最後に、本研究を実施するにあたりご協力頂きましたA幼稚園の園長先生をはじめとする諸先生方および保護者の方々に心より感謝を申し上げます。

2 「おとまりほいく」には、「お泊り保育」、「お泊まり保育」、「泊まり保育」、「合宿保育」、「宿泊保育」というように、様々な呼び方がある。本研究では、調査にご協力頂いたA幼稚園の「お泊り保育」という表現を用いることにする。

3 お泊り保育の実態についての実証的研究は、中尾・山内（2012）で整理をした。

4 今までに行われたお泊り保育の意義・教育効果についての実証的研究を整理すると以下のようになる。

2泊3日のお泊り保育に参加した年長児の保護者を対象に、その6ヶ月後に実施された調査（石崎・山内、1976）によれば、性格、行動や態度、友人関係の面などにおいて、お泊り保育参加児の約30%に変化が生じていた（もっとも、この結果は、著者らも指摘しているように、お泊り保育が転機となって、日常生活に変化が生じ、それが積み重なった結果だといえる）。

2泊3日のお泊り保育に参加した年長児の保護者を対象に、その約1ヶ月後に実施された調査（峯・二宮、2003）によれば、「子どもたちがお泊まり保育を終えて以前より変わったと思われる点」については、「あまり変わらない」は33.1%であるものの、「一人で泊まるに自信がついた」は44.1%、「たくましくなった」は26.0%、「自発性が出てきた」は16.5%であった。

1泊2日のお泊り保育に参加した年長児の保護者を対象に、その直後に実施された調査（清水他、2003）では、5段階評定の真ん中の値である「3」（どちらでもない）よりも得点が有意に高かった項目は、「宿泊保育のことをよく話す」、「またお泊まりしたい」と言う」であり、お泊り保育が園生活に何らかの変化を与える可能性が示唆された。

以上の結果から、お泊り保育には一定の教育効果が認められるといえよう。しかし、その効果は必ずしも全ての子どもに見られるわけではない。そこで、お泊り保育の教育効果に影響を与える要因についての実証研究を概観すると、以下のようになる。

前述の清水他（2003）では、子どもの生活習慣に焦点を当てた分析も実施されており、彼らによれば、お泊り保育の2週間前の事前調査において、洗顔の習慣が確立していた子どもは、確立していなかった子どもに比べて、お泊り保育で遊んだ友達と遊びたがっていた。そして、排便の習慣が確立していた子

どもは、確立していなかった子どもに比べて、お泊り保育で行った遊びをしたがっていた。つまり、お泊り保育前に生活習慣の確立を促すことは、お泊り保育の教育効果を高めるという可能性が示唆された。

中尾・山内（2012）では、(1)母親がお泊り保育を不安に思えば思うほど、子どもも不安になりそしてお泊り保育を楽しみにできない可能性があること、(2)お泊り保育においては、保護者や子どもの不安を取り除くことは重要であるが、それに加えて、子どもがお泊り保育を楽しみにすることもまた重要であることが示唆された。

5 フェイスシートにおける子どもおよび養育者の不安の程度、子どもがお泊まり保育を楽しみにしている程度、お泊り保育期待尺度とお泊り保育変化尺度については、中尾・山内（2012）のデータの再分析である。

6 乳幼児愛着研究では、愛着の個人差を表す場合には、「愛着分類」(attachment classifications) という用語が用いられることが多い。だが、本研究では、社会人格心理学系の成人愛着研究の測定法 (i.e., RQ) を用いて、子どもおよび保護者の愛着の個人差を査定した。そのため、本研究では、この流れで用いられている「愛着スタイル」という用語を、愛着分類と同様に、愛着の個人差を示す用語として用いる。

7 「保育者評定用レジリエンス尺度」(高辻, 2002) は、本来、保育者に評定を行ってもらうものだが、その項目内容から、連絡帳などで園の様子を聞いている養育者も評定が可能であると判断した。このことは、「園生活への適応尺度」についても同様である。

8 具体的には、この要因の部分には、子どもの性別(男児、女児)、子どもの所属クラス(年中組、年長組)、子どもの出生順位(第1子、第2子以降)のいずれかを当てはめて分析を行った。なお、本研究では、たとえば、2(子どもの性別) × 2(子どものクラス) × 2(事前事後)のように、子どもの基本属性を組み合わせて、3要因混合計画による分散分析も

実施した。ただし、1次および2次の交互作用は有意ではなかった。また、このような分析を行った場合でも、基本的な結果のパターンは、本文で示した結果とほぼ同じであった。

9 本研究の「子どもの園生活への適応は、お泊り保育前に比べてお泊り保育後では、減少する傾向にある」という結果は、清水他(2003)の「子どものは、お泊り保育後に母親に甘えたがるようになる」という知見とも一致する。したがって、お泊り保育後には、参加児のこのような要求に応えることは、本文中に示したように重要なことである (cf. 清水他, 2003)。しかし、お泊り保育後に子どもの園生活への適応の度合いが減少するとはいっても、その値は5.16であり (Table 2)、7件法の真ん中の値である「4」よりは有意に高い ( $t (51) = 9.32, p < .01$ )。そのため、お泊り保育が子どもの園生活に大きな悪影響を与えるということはないと考えられる。

## 引用文献

- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- 南風原朝和 (2001). 準実験と單一事例実験 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦(編) 心理学研究法入門—調査・実験から実践まで— 東京大学出版会, pp. 123-152.
- 平岩定法・一盛久子 (1987). 行事と保育 青木一・深谷鉄作・土方康夫・秋葉英則(編) 保育幼児教育体系 第2巻第4号 活動領域の指導 行事・集団づくり・実践記録 労働旬報社 p. 3-39.
- 石崎 龍・山内昭道 (1976). 幼児合宿保育の実践的研究 日本保育学会第29回大会発表論文集, 107.
- 数井みゆき(編) (2012). アタッチメントの実践と応用—医療・福祉・教育・司法現場からの報告 誠信書房

- 数井みゆき・遠藤利彦（編）（2005）。アタッチメントー生涯にわたる絆ー ミネルヴァ書房
- 加藤和生（1999）。Bartholomewらの4分類成人愛着尺度（RQ）の日本語版の作成 認知・体験過程研究, 7, 41-50.
- 小松孝至（2003）。幼稚園での経験、友だち、保育者に関する母子の会話—話題と子どもの語り方についての母親の報告から—発達心理学研究, 14, 294-303.
- 久木山健一（2005）。青年期の社会的スキル改善意欲に関する検討 発達心理学研究, 16, 59-71.
- Main, M. (2000). The organized categories of infant, child, and adult attachment: Flexible vs. inflexible attention under attachment-related stress. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 48, 1055-1096.
- 峯 岩男・二宮 穂（2003）。園内型お泊り保育についての考察—合同保育の実践的研究 XII—日本保育学会第56回大会発表論文集, 32-33.
- 中尾達馬・加藤和生（2004）。“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 中尾達馬・山内裕子（2012）。お泊り保育の意義に関する一考察—山口県にある私立A幼稚園のお泊り保育実践における参加観察を通して— 琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要, 19, 105-120.
- 清水益治・岡嶋淳子・米田匠子（2003）。附属幼稚園における宿泊保育に関する研究—宿泊保育前の生活習慣と直後の子どもの様子— 大阪樟蔭女子大学論集, 40, 157-164.
- Simpson, J. A., Ickes, W., & Grich, J. (1999). When accuracy hurts: Reactions of anxious-ambivalent dating partners to a relationship-threatening situation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 754-769.
- 塩崎尚美・無藤 隆（2006）。幼児に対する母親の分離意識—構成要素と影響要因— 発達心理学研究, 17, 39-49.
- Sroufe, L. A., Fox, N. E., & Pancake, V. R. (1983). Attachment and dependency in developmental perspective. *Child Development*, 54, 1615-1627.
- 菅田栄子（2000）。合宿保育 森上史郎・柏女 靈峰（編） 保育用語辞典 ミネルヴァ書房, p. 95.
- 高辻千恵（2002）。幼児の園生活におけるレジリエンス尺度の作成と対人葛藤場面への反応による妥当性の検討— 教育心理学研究, 50, 427-435.
- Urbana, J., Carlson, E., Egeland, B., & Sroufe, A. (1991). Patterns of individual adaptation across childhood. *Development and Psychopathology*, 3, 445-460.
- Waters, E. & Deane, K. E. (1985). Defining and assessing individual differences in attachment relationships: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points in attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 41-64.
- 谷田貝公昭・村越 晃・西方 豪・鹿又直子（1988）。合宿保育について—保育学会を中心にして— 日本保育学会第41回大会発表論文集, 568-569.

The aim of this study was to reveal child-mother attachment dynamism in *Otomari-hoiku* (child care camp), examining whether psychological changes were occurred by attachment classification, in (1) frequencies of mother-child conversation, (2) mother's sense of separation between pre- and post- child care camp, (3) children's adaptation for preschool, and (4) expectation and perception of mother for changes in children. Questionnaire survey was administered twice to 52 mothers whose children participated in the program at the A-kindergarten located in *Yamaguchi-ken*. Main findings were as follows: (1) Children were to decrease adaptation for preschool from pretest to posttest. (2) Insecure children talked more about themselves to their mother from pretest to posttest. (3) Insecure mother considered their children not only have been confident (especially girls), but also indulged. It could have been interpreted that those results represented a piece of process of chronic dysfunction of attachment and exploration in insecure dyads.

Keywords: child care camp, attachment, one-group pretest-posttest design